

「いのち」を考える文脈

飯

謙

わたしたちが^{いのち}生命の問題をそれ自体として日常の中で考えることは少ないかもしれません。しかし災害や戦争、事故、病など、心ならずも生命を落とす人を目の当たりにするとき、さらにその出来事が人間の尊厳を踏みにじるようなかたちで生じたとき、わたしたちは「生命とは何か」と考えずにおれません。聖書は単刀直入に、「生命は神のものである」（エゼキエル書 18:4）と宣言します。どういう意味でしょうか。人間は神の奴隷だと言っているのでしょうか。それに従うしかない、諦観を言い表しているのでしょうか。

古代ギリシア神話に基づく悲劇には、そのメッセージが読み取れます。たとえばオイディプスの神話は、人が運命に逆らうことができない悲しい現実を描いています。オイディプスの父はテーベという都市国家の王でした。神託によって、自身の生命が息子（オイディプス）に奪われると聞かされ、従者に息子を殺害するよう命じます。しかし息子は生き延び、やがて成長して、偶発的にではありましたが父を殺します。この物語は、たとえ運命を避けようと企てても最後にはそれが実現するという教訓を含むと解されています。

やはり古代ギリシアで語られたシーシュポス（シジフォス）のエピソードにも似た考えが示されています。この人はギリシア中部テッサリア王の息子でした。自分が王位継承できないことに怒って策を弄しますが成功せず、ついには地界に落とされます。そこで彼はゼウスから巨大な石を山頂に押し上げる労働を命じられます。しかし山頂近くまで来ると、石は地底まで落ちていく — 彼はこれを終生続けなければなりません。このストーリーにも、人の分を越えた行動を戒める思いが込められていると思えます。つまり、人は運命にしたがうしかないのだ、と。

古代ユダヤの文書である聖書も同様に語っていると思われがちです。けれども、聖書に言葉を残すコヘレトと呼ばれた知者は、次のように反論しています。すべてが定められているのならば、人が生きることは空しい、と。確かにそうです。受験勉強、辛い就職活動、それだけでなく人生の方向転換を強いられる機会は山ほどあります。最初から結果が決まっているとするならば、「労苦は何になろう」（コヘレ

トの言葉 1:2-3)。コヘレトは、そうであるならば快樂を追求し、愉悅に浸ろうと考えます。しかし「それも空しかった」と繰り返します。こうして試行錯誤を重ねた末、この人は運命があるかないかに疑念を表明しつつ、隣人のために「種を蒔こう」（同 11:6）と思い至ります。土地の所有者もはっきりしないコヘレトの生きた社会で種を蒔くことは、その収穫にあずかる人が誰であるか分からないという意味で、見返りを求めない愛（アガペー）と呼ぶことができます。

イエスもあるとき、「友のために命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ 15:13）、「自分を捨て……わたしに従いなさい」（マタイ 16:24）と申しました。これは自暴自棄の勧めではありません。日頃わたしたちは自分自身を一番大切だと思っているかもしれないが、それよりも大切なものと出会ってみよというメッセージ——マスタリー・フォー・サービスへとつながるメッセージです。わたしたちは、いろいろな理由から自分で自分のみを守るため汲々とせねばなりません。そのために、誰かを蹴り落とすようなことも胸を痛めることなくやっているかもしれません。しかし聖書はそれとは異なる在り方を示します。秋季宗教運動の季節。わたしたちが人格をかたち造る大切な時期に、マスタリー・フォー・サービスの空気の中で過ごす意義を心に刻みたく思います。

（神戸女学院大学学長）

「平和をつくり出す人たち」～心の中に平和を～

近 藤 紘 子

原子爆弾のことなど記憶にない私が広島語り部として歩むのは、次の時代を担う子供たちが神から与えられた命を大切に生きていって欲しいと祈り、願うからです。昭和20年(1945年)8月6日、私は広島の爆心地から1.1キロの牧師館にて、生後八ヶ月で家の下敷きになりましたが、奇跡的に助かりました。広島流川教会の牧師の子として生まれ育ち、廃墟となった広島の被爆者の苦悩を肌で感じ、また多くの救済